

軍歌と漢詩（其二）

——付、学徒兵の手紙と白樂天の詩——

丹羽博之

前稿に引き続き、軍歌の歌詞に見える漢詩的表現を考察する。戦争を知らない世代の些か時代錯誤的な面もあるかも知れない。だが、軍歌を知っている世代が急速に減りつつあることを考え、今書いておかないとの思いで敢えて筆を取る。明治時代における漢文学の影響の紹介、文化史考察の一助になれば幸いである。

一、勇敢なる水兵

戦前の教育を受けた人で「勇敢なる水兵」を知らない人はいないであろう。

佐佐木信綱作詞

奥好義作曲

—

煙りも見えず雲もなく

風もおこらず波たたず

鏡のごとき黄海は

軍歌と漢詩（其二）——付、学徒兵の手紙と白樂天の詩——

曇りそめたり時の間に

二

空に知られぬ雷か

波にきらめく稲妻か

煙りは空を立ちこめて

天つ日かげも色くらし

（三〜八省略）

『思い出の 軍歌集』（のぼら社一九六四年）による。以下本稿の軍歌はすべて同書による

「煙りも見えず雲もなく 風もおこらず波たたず」と否定を重ねる表現は、白楽天の詩の

嘉陵夜有懐二首（其二）〔0765〕

不明不闇朧朧月 明ならず闇ならず 朧朧たる月

非暖非寒慢慢風 暖に非ず寒に非ず 慢慢たる風

獨臥空牀好天氣 独り空牀に臥して 天氣好く

平明閑事到心中 平明閑事 心中に到る

等を始め、漢詩に多く見られる。平安時代の歌人大江千里はこの「不明不闇朧朧月」から

てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき

の句題和歌を詠んでいる。また「非暖非寒慢慢風」からは

あつからずさむくもあらずよきほどにふきくる風はやまずもあらなむ

（那波本に拠る。以下同じ）

（「千里集」七三）

の句題和歌を詠んでおり、日本人にも馴染み深い表現となっていた。

「鏡の如き黄海」も「菱池如鏡浄無波、白点花稀青角多 菱池鏡の如く 浄くして波無し、白点花稀れに 青くして角多し」(『白氏文集』2850) 等が背景にある。

「空に知られぬ雷」は紀貫之の名歌

桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける

(『拾遺和歌集』春・六四)

などや、

撒米はそらに知られぬ霰と見えたり

(『栄花物語』布引の滝)

等の日本古典の表現を取り入れている。

「天つ日影も色暗し」は

唐高適「別董大」

千里黄雲白日曛 千里の黄雲 白日曛く

北風吹雁雪粉粉 北風雁を吹きて 雪粉粉

唐王昌齡「従軍行五首(其五)」

大漠風塵日色昏 大漠の風塵 日色昏く

紅旗半卷出轅門 紅旗半ば巻き来て 轅門を出づ

などに見られる漢詩的表現が下敷きになっている。

土屋竹雨「原爆行」にも

怪光一綫下蒼旻 怪光一綫 蒼旻より下り

忽然地震天日昏 忽然地震ひ 天日昏し
とある。

古典和歌と漢詩に対して、佐佐木を始め明治期の文人は和歌漢詩に深い教養を持っていたのは、今更贅言するまでもなからう。

二、婦人従軍歌

婦人従軍歌

加藤義清作詞

奥好義作曲

一

火筒の響き遠ざかる
跡には虫も声たてず
吹き立つ風はなまぐさく
くれない染めし草の色

二

わきて凄きは敵味方
帽子飛び去り袖ちぎれ
斃れし人の顔色は
野辺の草葉にさも似たり

（三番〜六番略）

『日本の唱歌（下）』（金田一春彦 安西愛子編）の解説には

加藤義清は近衛師団の軍楽隊の楽手で、新橋駅頭で高官を見送るために軍楽演奏に参加していたが、その際凜々しい姿で戦地に赴く従軍看護婦の姿を見て、心を打たれ、この詞を作ったという。

とあり、内地で戦場経験の無い作詞者が激戦を想像して作ったものである。

古く『毛詩』の時代から政治、戦争と文学が深く結び付いていた中国では、悲惨な戦場の様子が詠み継がれて来た。

漢無名氏「戦城南」

戦城南 城南に戦ひ

死郭北 郭北に死す

野死不葬烏可食 野に死して葬られず 烏食ふ可し

唐王昌齡「塞下曲」

黄塵足今古 黄塵 今古に足り

白骨亂蓬蒿 白骨 蓬蒿に乱る

唐孟郊「弔国殇」

徒言人最靈 徒らに言ふ 人最も靈なりと

白骨亂縱横 白骨 乱れて縦横たり

等戦場に横たわる屍はリアルに表現されて来た。その中で、杜甫の代表作の一つ「哀王孫」に

昨夜東風吹血腥 昨夜東風 血を吹きて腥く

東來橐駝滿舊都 東來橐駝たくだ 旧都に満つ

という一聯がある。この詩は、安祿山の乱（七五六年）の時に、玄宗皇帝らが都長安脱出した後に逃げ遅れた王族貴公子を哀れんだものである。その中の一節で、安祿山の軍勢の輸送用橐駝（駱駝のこと）が血腥い東風とともに長安の都になだれ込んで来たことを歌う。

杜甫のこの詩は、唐詩三百首では「哀江頭」と「春望」の間に収められており、三首とも安祿山の乱を詠んだものとして著名。

和歌や大和言葉の伝統には戦場における血や腥などの表現は殆ど無い。明治になって軍歌を作詞するときには、漢詩ではしばしば詠まれる戦場の描写が粉本になったのであろう。乃木希典が「金州城下作」で

山川草木轉荒涼 山川草木 転た荒涼

十里風腥新戰場 十里風腥し 新戰場

と詠んだ背景には杜甫の詩や「婦人従軍歌」があったのではないか。「金州城下作」の「草木、腥」は安祿山の乱の悲劇を詠んだ杜甫の名高い「三吏三別」の一つ「垂老別」にある

萬国盡征戍 万国 尽く征戍

烽火被岡巒 烽火 岡巒を被ふ

積屍草木腥 積屍に 草木腥く

流血川原丹 流血に 川原丹し

を下敷きにし、「垂老別」のイメージと重ね合わせて作られた可能性もある。「垂老別」の冒頭は

四郊未寧靜 四郊 未だ寧靜ならず

垂老不得安 老ゆるに垂なんとして安らかなるを得ず

子孫陣亡盡 子孫 陣亡し尽く

焉用身獨完 焉ぞ身の独り完きことを用ひん

とあり、「子孫陣亡盡」は長男勝典を失った乃木希典の心情に沿うものである。後に旅順要塞の攻城戦で次男保典を戦死させ、乃木は文字通り「子孫陣亡盡」する。

さらに乃木の

凱旋有感

王師萬万征驕虜 王師百万 驕虜を征し

攻城野戦屍作山 攻城野戦 屍山を作す

愧我何顔看父老 愧づ我何の顔あつてか 父老に看ん

凱歌今日幾人還 凱歌今日 幾人か還る

の詩の「屍作山」は「垂老別」の「積屍草木腥」を意識したものではないだろうか。この詩の「愧我何顔看父老」は『史記』の項羽の故事を踏まえており、「凱歌今日幾人還」は王翰の有名な「古来征戦幾人回」からの連想であろう（石川忠久『漢詩の風景』）。これらのことから考えて、乃木はその詩作において、中国の有名な詩文を参考にしていたことが窺える。

三、ノルマントン号の歌

『国史大辞典』の「ノルマントンごうじけん」の項を挙げる。

ノルマントン号事件 不平等条約下における英国貨物船の邦人乗客遭難をめぐる紛争事件。明治十九年（一八八六）十月二十三日、横浜を出航、神戸に向かったマダムソン＝ベル汽船会社所有のノルマントン Normanton 号二百四十トン、航行途中暴風雨に遇い、同月二十四日午後八時ころ、三重県四日市より和歌山県檜野崎までの沖合で難破、沈没した。その際、船長ドレーク J. W. Drake をはじめ乗組員のイギリス人・ドイツ人などは全員ボートで脱出、漂流のところを沿岸漁村の人々に救助され手厚い保護をうけた（三人凍死、上陸後埋葬）。ところが、日本人船客二十五名はただの一人も避難できず、船中に取り残されたことごとく水死した。（中略）国内世論も船長以下乗組員の日本人船客にとつた非人道的行為に対し、大いに沸騰した。（中略）この遭難事件を演劇として興行しようとする者があり、人心の再燃を憂慮した政府はこれを中止させた。この事件は領事裁判権の撤廃など国権回復を要求する国民世論の昂揚と形成に、重要な契機をなしたのであった。

（田中正弘）

これを軍歌といえるかとも思うが、『思い出の 軍歌集』（のぼら社）を読んで気づいたことを記す。職業軍人の間での狭義の軍歌と現在我々の感覚の軍歌でかなりののずれはあると思う。

五九番まである長い歌詞であるが、その三八、三九番は

三八

これぞ所謂スローター

などで刑罰加えざる

などで刑罰加えざる

汝が国は兵強く

三九

軍艦大砲ありとても

わが国民は知識なく

国が実に弱くとも

鳥や豚ではあるべきか

明らかに非のある船長に刑罰が課せられない怒りを、「国が実に弱くとも鳥や豚ではあるべきか」と表現する。最初に読んだときには鳥と豚の意外な取り合わせに違和感を覚えた。鳥（鶏）はともかく豚は当時の日本人にはなじみが薄いものであったであろう。しかし、ここで何故、鳥（鶏）と豚が出てくるかという点、漢文の世界では鶏豚といえは家畜の代表だからであろう。

『新字源』の「鶏豚」の項には、

①にわとりと、ふた。②家畜の総称。

とある。「鶏豚」の例を調べて見ると

鶏豚狗 之畜、無失其時七十者可以食肉 鶏豚狗鹿の畜、其の時を失ふ時無くんば 七十の者以て肉を食らふべし

（『孟子』梁惠王上）

牛馬因風遠 牛馬風に因りて遠く

鶏豚過社稀 鶏豚社をすぎて稀なり

(白楽天「春村」[0705])

莫笑農家臘酒渾 笑ふ莫かれ 農家臘酒渾れるを

豊年留客足鶏豚 豊年客を留むるに 鶏豚足れり

(陸游「遊山西村」)

特に陸游の詩は彼の代表作として名高い。

開国間も無い弱小国日本とても、鳥や豚のような家畜ではない。ふとした語句のなかにも漢語が使われるところに明治前期の人々の漢文の素養の高さを窺わせる。

ノルマントン号の三、四番の歌詞には

三

旅路を急ぐ一筋に

外国船とは知りつつも

航海術にも名も高き

イギリス船ときくからに

四

ついうかうかと乗せられて

波路もおき遠州の

七十五里もはや過ぎて

今は紀伊なる熊野浦

軍歌と漢詩(其二)——付、学徒兵の手紙と白楽天の詩——

と笑いを誘う駄洒落も用いている。また、

十九

浮世は仮とはいいなから

常なき者は人ごころ

昨日の恩はきよの仇

斯かる奴とは露しらず

「昨日の恩はきよの仇」は、「昨日の敵は今日の友」（『水師營の会見』）を想起させる。「昨日の敵は今日の友」は『水師營の会見』の歌詞で特に有名になったが、その元は「昨日の友は今日の怨」（幸若・三木）「きのふの怨はけふの味方」（義経千本桜）等の江戸時代からの慣用的表現にあった。佐佐木信綱や大和田建樹はそれらの和漢の古典を自在に駆使して新しい唱歌を創作していった。古くからの慣用的表現を歌詞の中に取り入れる方が、歌う方にとってもなじみやすかったのであろう。

四、独立守備隊・朝鮮国境守備隊の歌

「哀れの少女」は明治二十一（一八八九）年刊行の『明治唱歌二』（大和田建樹・奥好義編）に載せられた。内容はアンデルセンの「マツチ売りの少女」に想を得たとされ、曲はアメリカのフォスターの「遥かなるスワニー河」^{（注）}である。その一番は

あわれの少女 大和田建樹作詞

吹き捲く風は 顔を裂き

見るみる雪は 地に満ちぬ

あわれ素足の おとめ子よ

別れし母を 呼ぼうらん

というものである。寒風が顔や肌を刺すという表現は馴染み深いが、寒風が顔を裂くという表現は目新しい。軍歌においては、厳寒の中を軍務に励む様子を次の様に歌う。

教導団歌（明治十九年頃） 作詞・作曲不詳

肌を破る寒さをも 笑うて忍ぶますらをの
心如何にと人問わば 請う見よ寒梅花一枝

独立守備隊の歌 土井晩翠作詞

旧戸山学校軍楽隊作曲

黄塵くらく天を覆い 緑林風に狂うとも
鎧の袖の一触れと 降魔の剣腰になる
炎熱鉄をとかす日も 氷雪肌を裂く夜半も
難き耐えて国防の 第一線に勇み立つ

朝鮮国境守備の歌 旧朝鮮国境守備隊作詞

旧戸山学校軍楽隊作曲

長白おろし荒むとき
氷雪四方を閉じこめて
今宵も零下三十度
太刀はく肌は裂くるとも
銃執る双手はおつるとも

軍歌と漢詩（其二）——付、学徒兵の手紙と白楽天の詩——

同胞まもる血は燃ゆる

これの軍歌に見える、寒風が肌を破るといふ表現も珍しい。また、寒さによつて指や手が落ちるといふ例も和文には少ないと思う。一方、漢詩文では、ともに良く用いられる表現である。

走馬川行奉送封大夫出師西征 馬を走らせて川行し

封大夫の師を出だし西征するを送り奉る

岑参

君不見走馬川行雪海邊 君見ずや 走馬川行 雪海の辺り

平沙莽莽黃入天 平沙莽莽 黃天に入る

輪臺九月風夜吼 輪台九月 風夜に吼ゆ

（四句略）

漢家大將西出師 漢家の大將 西のかた師を出し

將軍金甲夜不脫 將軍の金甲 夜も脱がず

半夜軍行戈相撥 半夜軍行して 戈相撥し

風頭如刀面如割 風頭刀の如く 面割くが如し

（以下六句略）

（『唐詩三百首』所収）

唐李華「弔古戰場文」（『古文真宝後集』卷五）には

至若窮陰凝閉 凜冽海隅 積雪沒脛 堅氷在鬚 鷺鳥休巢 征馬踟蹰 繪纒無温 墮指裂膚 當此苦寒 天假強胡。（窮陰凝閉して、

海隅に凜冽たるが若きに至りては、積雪脛を没し、堅氷鬚に在り。鷺鳥巢に休み、征馬も踟蹰す。繪纒温無く、指を墮とし膚を裂く。

此の苦寒に当たりて、天強胡に仮す。）

とある。

「吹き捲く風は 顔を裂き」（哀れの少女）は岑参の「剖面」等からの表現をまねたものであろう。「氷雪肌を裂く夜半も」（独立守備隊の歌）、「太刀はく肌は裂くるとも」（朝鮮国境守備の歌）の表現は「弔古戦場」の「裂膚」にその源泉を求められよう。

また、「手足は弾にくだくとも 指は氷にちぎるとも」（独立守備隊の歌）、「太刀はく肌は裂くるとも 銃執る双手はおつるとも」（朝鮮国境守備の歌）の「極寒のあまり手や指が凍傷で墮ちる」は、「弔古戦場」の「墮指」と対応している。「古文真宝後集」は江戸時代よく読まれており、作詞者が利用した可能性は高い。特に「太刀はく肌は裂くるとも 銃執る双手はおつるとも」は「墮指裂膚」に見事に対応している。前掲の岑参の詩も『唐詩三百首』にも収められている。『唐詩三百首』も荻生徂徠の称揚以来、日本人にも親しまれて来た。

懐かしい故郷を離れて極寒の地を守る兵士の苦勞に、中国の辺境の地で戦う塞外詩のイメージを脳裏に重ね合わせて作詞されたのである。朝鮮の嚴寒は日本人には未経験のことであり、その寒さを大和言葉では表しにくいという事情も有ったかもしれない。江戸末明治初期に生まれた人は漢詩、漢学の素養が自然と身につけて、こうしたところにも漢詩的表現が見えかくれするのであろう。

「哀れの少女」に付け加えるならば、岑参の作

北風捲地百草折 北風地を捲きて 百草折れ

胡天八月即飛雪 胡天八月 即ち雪を飛ばす

（岑参「白雪歌 送武判官歸京」『唐詩三百首』）

に見える「北風捲地」は「ふき捲く風」（「哀れの少女」）に類似しており、「面如割」「顔を裂き」の類似性から考えて、大和田は岑参の塞外詩を利用した可能性が高い。大和田の作品には漢詩を下敷きにした作品が見られることについては前稿（「漢詩と軍歌（其一）」）大手前大学人文科学論集第一号）において少し触れた。

五、学徒兵の手紙と白楽天の詩

西宮市立図書館でふと手にした『雲ながるる果てに』。その存在は知っていたが、読むのは初めてであった。たしか映画にもなっていたように思うが、ばらばらと目次をめくっていると、「愛児への便り」（この上村真久氏の便りは胸を打つ）、「靖国の杜頭で」「最後の手紙」などの中に「燕の詩に思う」という一文があった。興味を覚えて開いて見ると

真鍋信次郎

九州専門学校 福岡県 十三期飛行予備学生 二十年五月二十五日 南西諸島にて戦死 二十二歳

（前半略）

変なことばかり書きましたが、しかし、散るべき時にはにっこりと散る。だが生きねばならぬ時は石にかじりついても生きぬく、これがほんとうの日本男子だと思います。御安心ください。も一つ自分の御願いを聞いていただきたい。次に書く白楽天の「燕の詩」、

梁上雙燕あり 翩翩たり雄と雌と

泥を銜む兩椽の間 一巢四児を生ず

四児日夜に長じ 食を索めて声孜孜たり

青蟲は捕らえ易からず 黄口は飽く期なし

嘴瓜弊れんと欲すといえども 心力疲るるを知らず

須臾にし干往来す 猶恐る巢中の餓えんことを

辛勤三十日 母瘦せて雛漸く肥えたり

喃喃として言語を教え 一一毛広を刷う

一旦羽翼成り 引きて庭樹の枝に上る

翅を挙げて回顧せず 風に随って四に散飛す

雌雄空中に鳴き 声尽くるまで呼べども帰らず

却って空巢の裏に入りて 啁啾として終夜悲しむ

燕、燕悲しむこと勿れ 爾当に返りて自ら思ふべし

思え爾が雛たりし日 高飛して母に背きし時を

当時父母の念 今日爾まさに知るべし

以上のごとく彼等の子を思う心、まして我々の両親の我々をいつくしみそだてられた恩の大ききにおいては非常に大なるものと思う。いろいろの大なる苦難にうちかかって、我々をこのようにそだてあげられた御恩について考えてみよう。涙が流れる。どうしてもお母さんだけにはあの苦難の道を考えては、充分に孝養をつくさなければ、我々の良心が許しませんね。自分は現在軍籍に身をおいている故、直接お母さんに孝養をつくすことはできない。(略)

姉弟妹三人がっちりと固くスクラムを組んでやりましょう。

理屈っぽいことばかり書いたが、こんなことは貴女にはよくわかっていると思います。しかし、真理とはきわめて平凡なものです。だがその実行はなかなかできないものです。

樹静まらんと欲すれど風やまず

子養はんと欲すれど親またず

ゆきて追ふべからざるは親なり

です。以上については、よくよくヨシ子にいいふくめて下さい。これが貴女に対する最大のねがいです。最後にご両親様によろしく、また兄さんの全快の一日も早からんことを祈って擱筆します。

健康に御注意下さい。

姉上様

信次郎拝

* 『雲流るる果てに』では「瓜」「干」とあるが、瓜は瓜、干は十の誤植であろう。

というものであった。白詩の「燕詩」を引用して、姉に父母の愛情の深さを訴える。

ところが白詩は「燕詩示劉叟」の題の下に「叟有愛子、背叟逃去。叟甚悲念之。叟少年時、亦嘗如是。故作燕詩以諭之。（叟に愛子有り、叟に背きて逃げ去る。叟甚だ之を悲念す。叟も少年の時、亦た嘗て是の如し。故に燕の詩を作りて以て之を諭す。）」という注がある。

あれだけ親鳥が心身を碎いて雛を育てたのに一旦羽翼成れば、「拳翅不回顧、隨風四散飛」した。しかし、嘆くこと勿れ、汝自身もその昔「高飛背母飛」したのではないかと論ず。前半にながながと事細かに育雛を述べたのは、結末のどんでん返しの効果を高めるための伏線であった。そこに白楽天特有の皮肉、物語りの展開があったわけだが、まじめな真鍋さんは前半の親燕が雛を心こめて育てる描写ばかりに心を奪われたようだ。けれども、真摯な真鍋さんの心情を思いやれば、「涙が流れる」。

白楽天の作品は、彼の在世中から朝鮮や日本にも争って伝えられ、異国の人々にも読まれ、伝写されていた。二十世紀に生を享けた真鍋さんも白詩の持つ魅力にひかれて生前愛読していたのであろう。家族への手紙の中にも白詩を引用するところに、戦前の高等教育、漢文教育の水準の高さがしのばれる。付題を「特攻隊員の遺書と白詩」とするつもりであったが、「南西諸島戦死」とあるだけで、「神風特別攻撃隊〇〇隊」の記事が無いから特攻出撃ではなかったであろう。しかし、特攻に準ずるような死を覚悟しての手紙であったに違いない。それにしても、このような孝行息子を亡くされた親御や家族の悲嘆や如何ばかりであったらうか。その特攻隊の人に対して

太平洋戦争中、護国の化身であるかのように称えられていたいわゆる特攻隊員たちが、戦争が終わるとともに、急転直下、まるで悪魔の象徴でもあるかのように非難攻撃されるに至ったことは否定できない事実であった。

（奥宮正武『海軍特別攻撃隊』朝日ソノラマ・三〇九頁）

というからひどいものだ。遺族は二重三重の苦しみを味わったに違いない。戦前僅かに数パーセントといわれた高等教育を受け、優秀であったが故に難しい飛行機乗りになったという皮肉な面もあったのだろう。中年の白楽天が好んだ『莊子』の「木雁」（曲がりくねって使い物にならない木は見捨てられて長生きできるが、良い声で鳴けない雁は、値打ちがないといって殺される。才能が無い方が長生きできる場合

もあれば、才能が有るゆえに不幸になることもある。果たしてどちらが良いのかの寓話を想起させる。

一千百余年の時空を越えて、海東の国日本でこのように引用されていたと白楽天が知ったら何と思うであろうか。彼は若き日、「新豊の折臂翁」で徴兵忌避の為、わざと右臂をへし折って生き永がらえた翁を詩に詠み、戦争反対を訴えたのだが。そうした詩は戦前の日本は読まれなかったのだろうか。

注

1 「第四章 独立守備隊・朝鮮国境守備隊の歌」の一部は、「明治唱歌『あはれの少女』」に見る和洋中折衷の文化——一九世紀の米・丁・中・日文化の融合」の題目で、東アジア比較文化国際会議（二〇〇〇年一〇月一五日 国学院大学）において口頭発表した。米のフォスターの曲に、デンマークのアンデルセンの「マツチ売りの少女」に想を得た内容の歌詞を日本人がつけ、その中に漢詩の表現を利用した「面割」が用いられている。

後記

前稿「軍歌と漢詩（其一）」発表後、非常勤先甲南大学の受講生（科目等履修生）であった山永明博氏から有馬敲『替歌研究』（KTC中央出版）を紹介された。この書に、已に前稿で指摘した（海軍軍歌）↓（山の歌）の替え歌の例は挙げてあった。